

— 分科会 —

特別支援学校



(財)日本学校体育研究連合会

第 10 分科会

長野県長野養護学校

第 11 分科会

信州大学教育学部

附属特別支援学校

第 10 分 科 会

研究主題

児童生徒が主体的にかかわるための支援はどうあったらよいか

～ 生徒の思いをとらえなおし、生徒の思いから始まり思いに寄り添って進める授業づくり(中学部) ～

～ 卒業後も運動に親しむ生徒を育てるための授業づくり(高等部) ～

ようご
長野県長野養護学校

日 程

9:20 9:40 9:50 10:20 10:50 11:40 13:00 13:10 13:30 14:20 14:50 15:00

受付	移動・準備	公開授業 「中学部」	移動・準備	公開授業 「高等部」	昼食	開会行事	研究発表	授業研究会	指導助言	閉会行事
	自由参観授業 ほほえみ教室 9:40-10:30 小学部 6 年 10:10-10:30				アトラクション 「ダンス」 12:40-12:50					

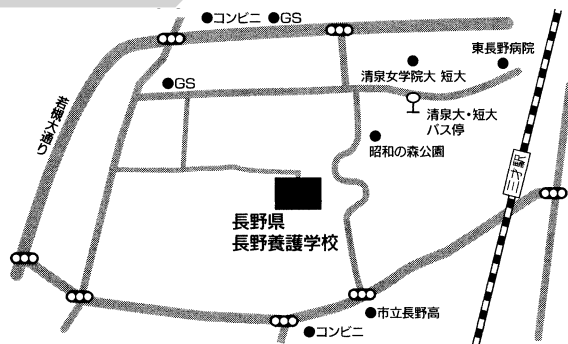
※ 自由参観授業 アトラクションは自由にご覧下さい。

場所：ほほえみ教室（ほほえみ教室）・小学部（スマイル）・「ダンス」（体育館）

公開授業内容

中学部	单元名 「わくわく ボール広場」	体 育 館
高等部	单元名 「めざせ ボールの達人」	体 育 館
	单元名 「めざせ ホッケーサイダー」	体 育 館

学校所在地



交通機関

- 最寄駅
JR 信越線「三才駅」下車 徒歩 15 分
- 経 路
長野駅
↓ 所要時間 7 分
JR 信越線「三才駅」下車
徒歩 15 分

※シャトルバス（有料）長野駅東口より

学 校 概 要

学校名	長野県長野養護学校		
校長名	大 井 透		
学級数	61学級	児童・生徒数	222名
所在地	〒381-0041 長野市徳間宮東 1360		
連絡先	TEL 026-296-8393 FAX 026-251-3177		

【学校紹介】



本校は、昭和36年に開校し、今年51周年を迎えた、小学部・中学部・高等部を抱える知的障害特別支援学校です。年々増加傾向にあった児童生徒数に対応するように、平成17年には更級農業高校内に高等部「更級分教室」を開室（H22年度、稲荷山養護学校に移管）、平成22年度、須坂市立須坂小学校内に小学部「須坂分教室」を（H23年度、須坂市立須坂支援学校として開校）、同年度、長野盲学校内に高等部「朝陽教室」を開室している。

本年度は、長野市を中心に、近隣の2市3町2村から小学部51名、中学部57名、高等部114名、全校児童生徒222人が集まっている。障害種の多様化に対応して、肢体不自由児や医療的ケアが必要な児生のための「ほほえみ教室」を開設したり、誰にも見てわかりやすい校内表示・誰にでもやさしい学校行事の実施等を目指したりして児童生徒一人一人の教育的ニーズに合わせた教育支援を目指している。本年度から実施となった「知的障害特別支援学校新学習指導要領」に則って、各部「合わせた指導」（遊び、生活単元学習、作業学習等）を中核にした教育課程を進めていて、その生活の中核となる最大の学校行事、学校祭「長養祭」を10月14、15日に開催して、大きな盛り上がりを迎えたばかりである。

【学校教育目標】

「がんばって いくよ」「げんきで いくよ」「むねはって いくよ」

合い言葉 ～ 笑顔 ・ 元気 ～

※ 児童生徒にとって少しでも覚えやすく、理解しやすい目標にしようとH22に改めた。

【教育方針】

- (1) 子どもの人権を大切にしたい(的確な捉えによる的確な支援)の実現
→児童生徒の人権を尊重した教育を進めます。
- (2) 学校生活(中身)づくり・授業改善
→各教科等を合わせた指導(遊びの指導、生活単元学習及び作業学習)を中核とした「生活づくり」を進めます。
- (3) 誰にも優しい、安心安全の学校生活(環境)づくり
→だれにもやさしい、安心安全な環境整備・学校行事・年間計画を目指します。
- (4) 特別支援教育のセンター的機能の発揮
→特別支援教育のセンター的機能を発揮します。



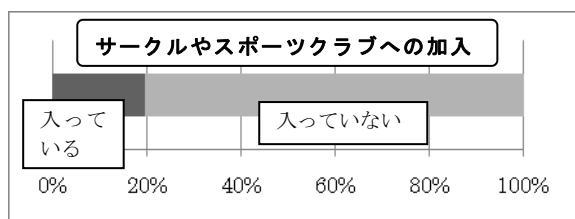
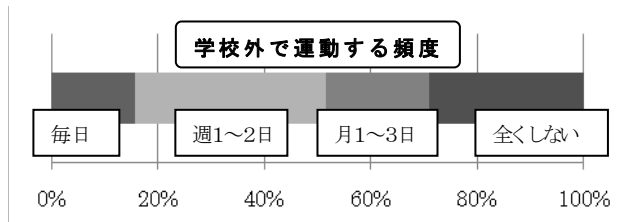
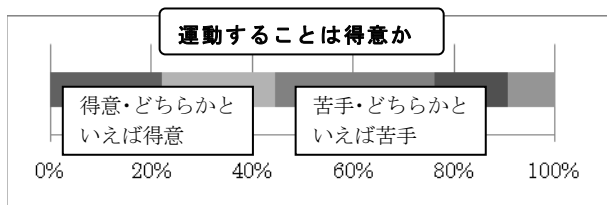
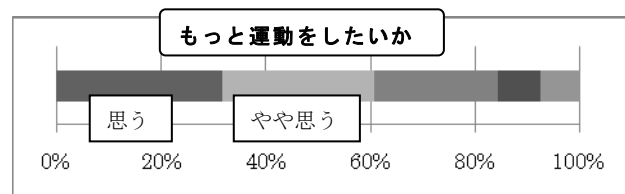
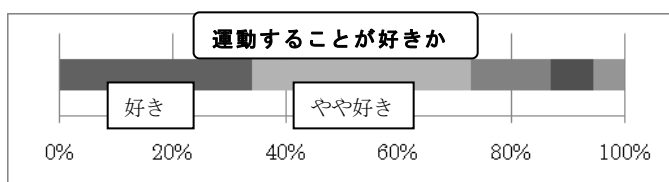
1 研究主題

児童生徒が主体的にかかわるための支援はどうあったらよいか

2 主題設定の理由

本校の教育方針は『すべての子どもの人権が尊重され、子どもが主体となる教育をすすめる』である。「子どもたちの人権を守る（大切にする）」とは、「的確なとらえと適切な支援をとおして、子どもたちが将来生きていくのに必要な力を育てる」と捉え、子どもの人権を尊重し、多様な障害の状況や発達段階および特性に配慮し、生涯を見通して個々の子どものニーズに応じた教育をねらいとしている。また、教育課程編成の基本には「体力づくりと主体的に社会参加していく力が育つ指導・支援」を挙げ、体力づくりを大切なことからの1つとして位置づけている。

本校では小学部1年生から高等部3年生までの幅広い年齢層の児童生徒が学校生活を送っている。全校児童生徒に向けて以下のような実態調査を行った。^{※1}『運動やスポーツをすることが好きかどうか』の問いには約34%の児生が「好き」と答え「やや好き」と合わせると全体で7割を超え、体を動かすことが好きな児童生徒が多い。また『運動やスポーツをもっとしたいか』の問いには「思う」「やや思う」が共に約30%で、体を動かすことに対する意欲もあると考えられる。



※1 文部科学省の「運動習慣等調査」の項目に沿って行った。児童生徒が回答したものと、担任から見てどう思うか（本人が回答できない場合）を合わせて集計した。

『運動やスポーツをすることが得意かどうか』の問いでは「苦手・どちらかといえば苦手」と答えた割合の方が「得意・どちらかといえば得意」を上回った。また学校以外では「運動やスポーツを（全く）しない」児童生徒が約3割いて、地域のスポーツクラブやサークルへ参加しているのは全体の約2割だった。全体的には運動への意欲はあるが、苦手意識を持っていたり学校外で運動する機会が少なかったりすることから、積極的にかかわれない児童生徒もいる。また、他の障害を併せ持つ児童生徒も多く、個々の実態は多様であるが、本校では、一人ひとりの教育的ニーズを把握し、生活や学習上の困難を改善又は克服するために適切な支援を行い、児童生徒の活動への参加、活動が広がることを目指している。

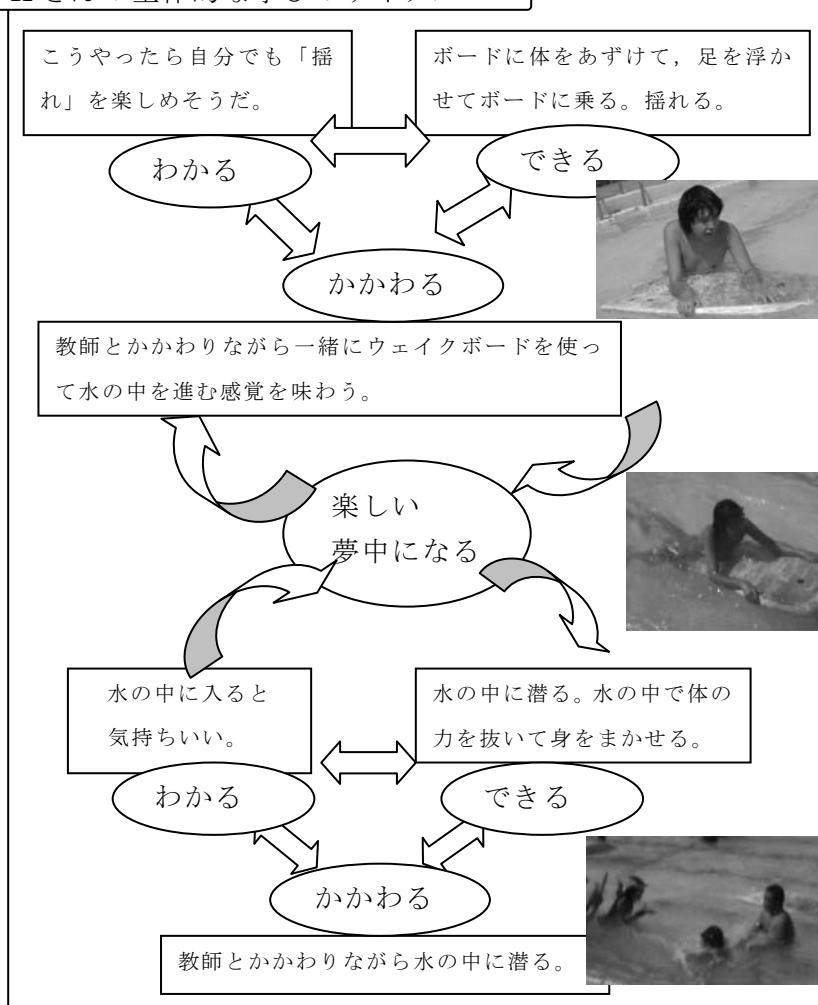
「できる」「わかる」「かかわる」から「楽しさ」を実感し、主体的にかかわるようになった K さん

K さんは小学部 1 年生から 12 年間本校に在籍していた生徒である。小学部の頃は水遊びが好きだったが、中学部の頃からプールに入らなくなり、高 1 で出会った時には、プールサイドで（教師がかける）霧のシャワーを浴びるくらいで、小プールや大プールに入ることはほとんどなく、不機嫌な様子の時が多かった。高 2 になり、プールサイドで他の生徒が活動する様子を見る、教師の誘いで小プールや大プールに入るなどの姿が少しずつ見られるようになった。小プールには自分から入り歩き回る場面も見られるようになったが、大プールに入ることは少なく、全身が水の中に入ることはまだ抵抗があるようだった。

そんな K さんの高 3 の姿である。昨年度の様子から、小プールから大プールへ活動を広げていけそうだと考えた教師は、様子を見ながら大プールへ誘うように試みた。誘いに応じて入る時もあったが、入るのを嫌がったり、入ってもすぐ出てしまったりすることもあった。教師は無理強いをせず、本人の意欲が高まるのを大切に見守るようにした。音楽が好きな K さんは、水泳の時間の途中にある『うずまきタイム』（音楽をかけて大プールで行う、全員が同じ方向に進んで水の流れをつくる活動）を楽しむ場面が出てきた。中に入らずプールサイドにいることもあったが、友だちが歓声をあげて楽しそうにしている様子を眺めているうちに、自分も入りたくてたまらないような表情を見せ、小走りで大プールに入っていくような場面も見られるようになった。

夏休み明け、教師は K さんにウェイクボードを提示した。最初は、教師がボードを持ち、K さんがそれにつかまり、教師が引っ張るようにし、慣れてきたところでボードを左右に振って体が揺れるようにするなどして K さんの様子を見た。最初はボードにしがみついて振り落とされないように体をかたくしていた K さんだが、だんだん、水の中に落ちてもしやめようとせずに、自分からボードに手を伸ばすようになっていき、そのうち一人でもボードを持って水の中を進むようになった。また、ボードを斜めに持つようにしてわざと不安定な状態につかまり、（自分から）水の中に落ちるような場面もあった。また、追いかける（遊び）が好きな K さんを、水中で教師が追いかけてみると、（逃げたいけれど、どうしていいか困って、とっさ

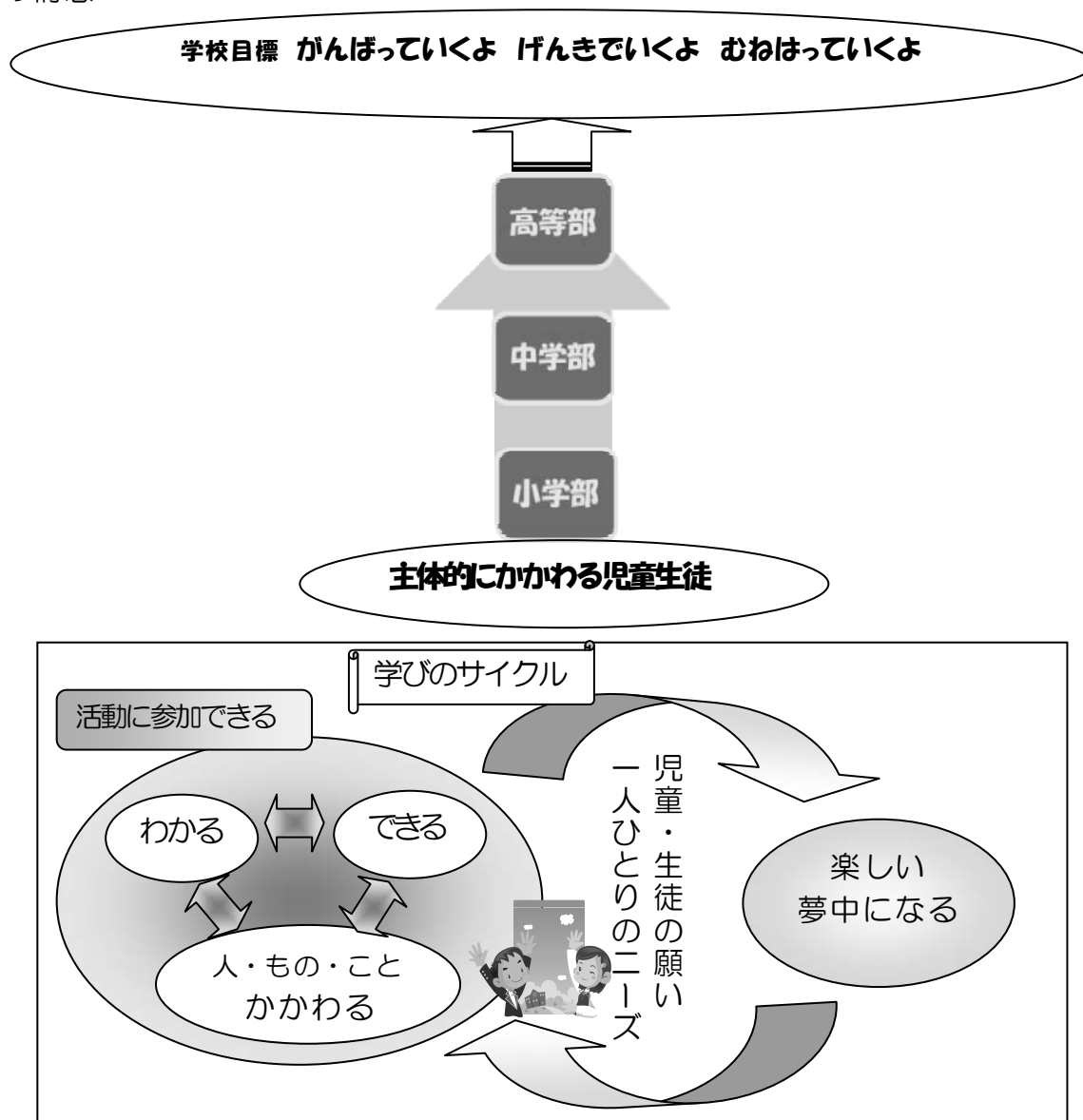
K さんの主体的な学びのサイクル



に水中に逃げたかのように) Kさんは自分から水中に潜った。高等部に入って初めて見る姿だった。

Kさんは、教師とのかかわりの中で「揺れる」ことの楽しさに気づき→どうやったら自分でも「揺れる」状態が作り出せるかがわかり→自分一人でもやってみることができて→活動に主体的にかかわる姿が生まれていった。また、水に「潜る」動きもだんだん時間が延び、まるで水中での時間を楽しんでいるかのように、手足を自由に動かす余裕を見せるようになっていった。教師とのかかわりの中で「水中に潜ることの楽しさ」に気づいた Kさんが、「水中で体を浮かせて手足を自由に伸ばすこと」ができ、更に活動に主体的にかかわるようになっていった姿であると考え。Kさんの姿から、児童生徒が「できる」「わかる」「かかわる」ことができて「楽しさ」を実感し、「もっとやりたい」という主体的なかわり(主体的な学びのサイクル)が生まれたのではないかと考えた。またこのサイクルは、「ウェイクボードで揺れを楽しむ」ことから「水中で自由に手足を伸ばすことの楽しさ」に発展していったように、広がっていくのではないかと考えた。

研究の構想

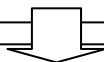


長野大会のテーマは「すべての子どもが夢中になり，健康で豊かなスポーツライフの実現をめざす体育学習の創造～「わかる」「できる」「かかわる」楽しさの提供～」である。このテーマを受け，本校では，児童生徒一人ひとりの願いやニーズにもとづいて「わかる」「できる」「かかわる」授業を行うことを目指している。児童生徒が活動に参加でき，「楽しい」「夢中になる」経験が「もっとやりたい」という活動への意欲を生み，そこに主体的な学びのサイクルができ，その学びのサイクルを小学部→中学部→高等部へと続く１２年間で積み重ねていくことで本校の学校目標「がんばっていくよ」「むねはっていくよ」「げんきでいくよ」につながっていくことを願って本主題を設定した。

３ 研究の仮説

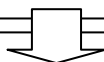
〈このような児童生徒に〉

- 「運動をすることが好き」と感じている
- 運動することに苦手意識をもっていたり，運動経験が少なかったりする
- 他の障害を併せ持つ児童生徒も多く，多様な実態がある



〈このような支援をすることで〉

- 一人ひとりの実態を的確に把握し
- 願いやニーズにもとづいて
- 一人ひとりに「わかる・できる・かかわる・楽しい」授業を保障する



〈このような姿になるだろう〉

- 主体的にかかわる姿が生まれるだろう
 - ・活動への見通しがもてる
 - ・教師や友だちと一緒に目標に向かって活動する
 - ・出来なかったことが出来るようになる
 - ・教師や友だちと一緒に活動して「楽しさ」を実感する
 - ・自分から動き出す
 - ・「こうしたい」という願いをもつ
 - ・「もっとやりたい」という活動への意欲が高まり，繰り返して取り組もうとする
 - ・活動が広がる
 - ・自ら他者（友だちや教師など）にかかわろうとする／かかわりが広がる

４ 研究の重点

- (１) 児童生徒の願いやニーズを大切にした支援
 - ① 個別の指導計画をもとにした児童生徒の願い，課題の見返し
 - ② 実態や興味関心に合わせた単元設定，単元展開
- (２) 「わかる」「できる」「かかわる」「楽しい」授業づくり
 - ① 児童生徒の実態に合わせた場の設定，教材教具の工夫

5 研究の内容と実践事例

【実践事例1】小学部『からだのじかん・ゆらゆらたいそう』（平成22年度～23年度）

「からだのじかん」に自分から会場まで移動したり、マットを準備したりするようになったMさん

小学部では、身体の心地よい体験が、運動の発達を促すとともに、情緒の安定やコミュニケーションのあり方にも関連するのではないかと考え、平成22年度から「からだのじかん」を日課の中に毎日位置づけている。身体の硬さやぎこちなさがあったり、情緒面で不安定になりやすかったりする児童に対して、教師と一対一のリラックス体操『ゆらゆらたいそう』を行っている。

身体の動き	身体の動きのねらい
寝ゆら	・膝を上下左右に揺らしてもらうことにより、膝周りの筋緊張を弛める。
足ゆら	・股関節を左右に動かしてもらうことにより、股関節周りの筋緊張を弛める。 ・足を床につけてもらうことにより、足裏への意識を向けやすくする。
ストップ	・股関節の前後の方向の筋緊張を弛める。
手ゆら	・肩関節を上下に動かしてもらうことにより、肩関節周りの筋緊張を弛める。 ・軽く指先を引っ張ってもらうことにより、腕全体に対しての意識を向きやすくする。
ストップ	・肩関節の上下方向の筋緊張を弛める。

1 Mさんの姿から

5年生の時、Mさんは「からだのじかん」に行く『ゆらゆらたいそう』で、教師からの身体接触を拒む傾向にあった。そこで教師は、体操で求める身体各部への働きかけよりも、体操の曲を聴きながら心地よくリラックスできることを中心に支援してきた。

6年生になり担任間で確認しながら以下のような支援を心がけてきた。『ゆらゆらたいそう』の間、マットに横たわってリラックスすることをねらい、本人の反応を見ながら腰や肩、肘など本人が過敏に反応しない部位をさすることから始め、約8分間の働きかけの中で徐々に体の揺れを与えていき、そこから得る心地よさもゆっくり時間をかけて徐々に感じていけるように取り組んだ。『ゆらゆらたいそう』前後の過ごし方も毎回同じようにして、「からだのじかん」全体の過ごし方に本人が見通しを持てるようにし、安心して活動に取り組めるような環境を整えた。大きく



体を動かしたいというような本人のサインが見られたら、「からだのじかん」前の自由時間にプレイルームで過ごすようにした。

このようにして、「からだのじかん」に取り組む続けると、5月上旬には『ゆらゆらたいそう』本来の働きかけのほとんどを受けられるようになった。また、5月下旬には「からだのじかん」前に自分から『ゆらゆらたいそう』を行う教室に移動するようになったり、教室に着くと教師の簡単な声がけでマットを自分で持って

所定の場所に敷いたりするようになるなど主体的にこの活動に向かえるようになってきた。また、身体機能面でも、階段を下りる時に左右交互に足を1段ずつ先へ進めながら下りる、靴の着脱時の前屈みになる姿勢が少し深くなってきている、膝の曲げに対する緊張が少し改善されてきている、などの変化が見られてきている。

2 考察

Mさんの『ゆらゆらたいそう』でのねらいとその環境を常に一定になるようにしたことは、有効な支援だったと考えられる。それに加え、教師の同じ働きかけに対して日々少しずつ異なった反応を返すMさんの動きに合わせ、対応を変えるなどしてMさんにとって心地よい時間となることを、模索していったことも有効だったと考えられる。担任間で『ゆらゆらたいそう』時のMさんへの支援について意見交換し合い、その時々Mさんの様子を探り、Mさんに寄り添った支援をすることの大切さが挙げられる。

【実践事例2】ほほえみ教室 『サンタの森で遊ぼう』（平成22年度）

心と体の準備を整えることで活動への意欲を高めることにつながったAさん

ほほえみ教室には、小学部から高等部までの肢体不自由を伴う重度重複の障害がある通学生と訪問生が在籍している。個の課題に沿って体を使う活動の他に、週に2回「からだの時間」を位置づけ、「揺れを中心に遊具を使って身体を動かす活動」「コミュニケーションをとりながら体の緊張を弛める活動」を設定し、児生に語りかけながら身体に触れ、児生が自分の身体の部位をイメージできるような活動を継続的に行ってきた。個々の活動の中で、歩行器を使った歩行の際にしっかりと足裏をつけて移動する姿や、教師が見せた好きなおもちゃに自分から近づいて手を伸ばすなど、身体のイメージの高まりと共に、身の回りの物や人への意識の高まりが見られるようになった。このような児生に、ダイナミックに手足を動かすことができ、友だちや教師の存在を意識しながら活動できる場を設定して、集団での自立活動を行うことが、意欲的・主体的に体を動かすことにつながると考えて単元を設定した。

1 単元名『サンタの森で遊ぼう』

2 授業の概要

（1）ねらい

- 大きな坂や滑り台、バランスボード等が配置されたサンタの森で、自分から上る・転がる・揺れる・滑るなどの活動をする。
- サンタや教師とかかわってからだを動かす中で、感じた思いを自分なりに表出する。

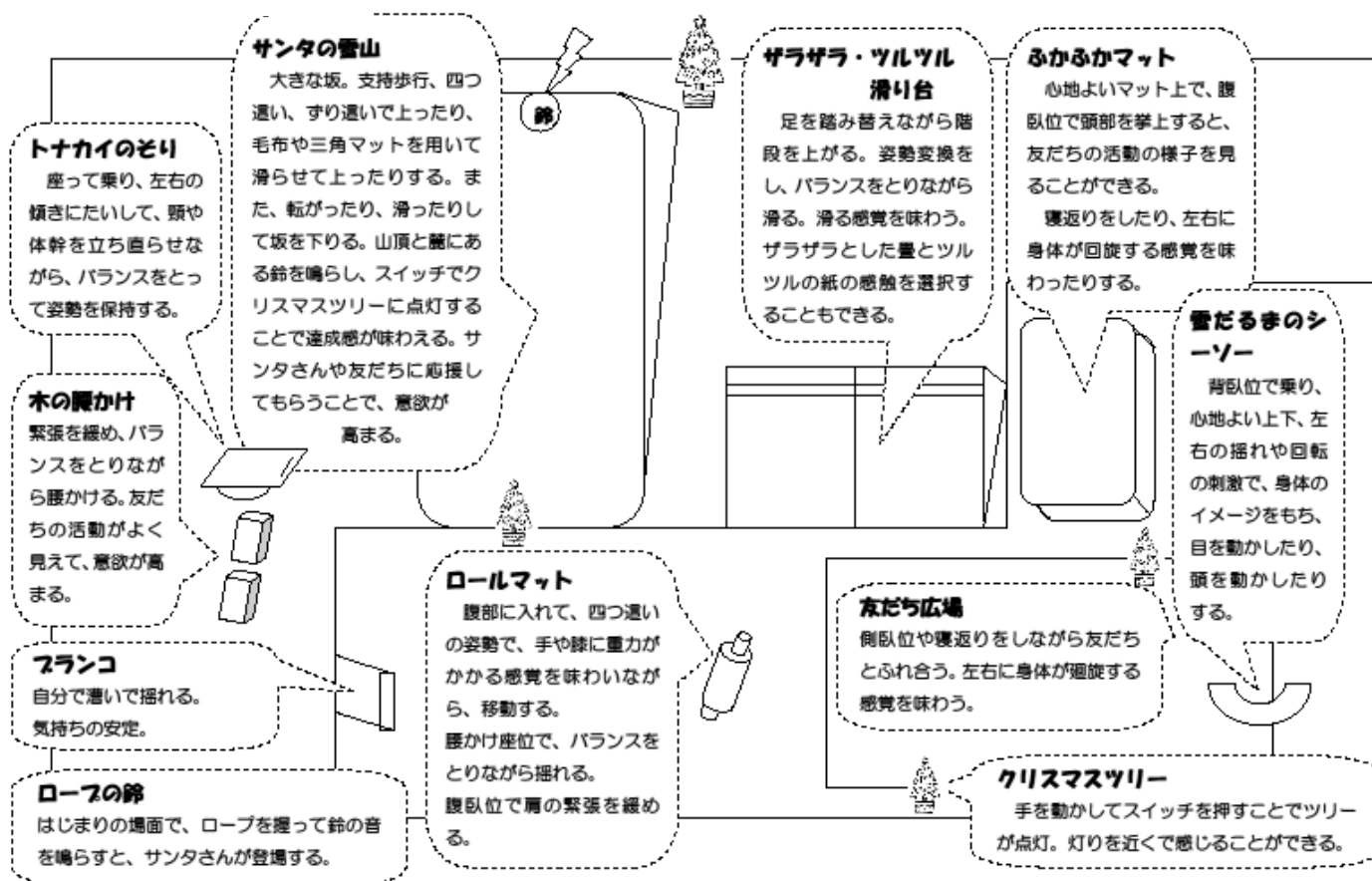
（2）展開

- ①準備体操をする。 ②遊具を使って体を動かす。 ③ゆっくり振り返りをする。



覚醒レベルが安定せず、自ら動くことの少なかったAさんに対し、朝の活動で体操や三輪車などを丁寧に行って心と体の準備、朝の会での座位姿勢や係分担など、意識を持続する工夫や支援を行うことで、集団での自立活動で覚醒レベルが上がり、自ら体を起こす、おもちゃに手を伸ばす、一定時間姿勢を保持するなど主体的に活動する姿が多く見られるとともに、視線や声による表出も多く見られるようになった。また、1日を通してそうした姿が多く見られるようになってきた。

(3) 場の設定



【実践事例3】 中学部3年『サッカー大会をやろう！！打倒！パルセイロ』（平成23年度）

「シュートしたい」という願いをもち達成感や満足感をもって活動に参加できた T さん

3年生は、昨年度「ハッピースタディ体育」で、AC長野パルセイロとの交流を軸に約2ヶ月間、体育館や視聴覚室、フィットネスなどでサッカーをした。今年度も、フィットネスに散歩に行く際にサッカーボールを持って行ったり、休み時間に友だちや教師を誘ってサッカーをしたりしている生徒の姿が見られた。

1 単元の目標（全体）

- ◇ボールを追いかけて走ったり、ボールを蹴ったり、シュートを決めたりする楽しさや気持ちよさを味わう。
- ◇少人数で編成されたチームで、生徒同士が助け合ったり、教え合ったりして、チーム意識を高め、自己肯定感や所属感を高める。
- ◇円陣を組んで声を出したり、試合前後の挨拶や握手をしたりすることを通して、仲間や対戦相手を大切に思う気持ちを養う。

2 単元の展開

全15時間扱い（朝9：50～10：20に実施）

活 動 内 容	
①	1 パルセイロとの対戦をビデオを見て振り返る 2 練習日程を確認 3 チーム編成発表 4 リスペクトについて 5 チーム会議
②	基礎練習① 「ボールに触れよう」
③	1 ランニング 2 準備体操
④	3 集合・あいさつ・メニュー確認
⑤	4 ボールタッチ (1) からだのいろいろな部分でボールに触れよう (2) ボールを蹴り上げよう (3) 狙ったところに蹴ろう 5 ボールゲーム (1) ポストシュート (2) 先生のボールをとっちゃえ！ゲーム！ 6 まとめ
⑥	ゲーム大会 「試合をやろう」
⑦	1 集合・あいさつ・メニュー確認 2 ランニング 3 準備体操 4 試合
⑧	5 チームごとまとめ
⑨	6 全体まとめ
⑩	
⑪	パルセイロとの対戦に向けて、チームハピネス結成！
⑫	「ひとつになろう！チームハピネス」
⑬	ランニング 準備体操 集合・あいさつ・メニュー確認 試合 大人チーム vs チームハピネス 全体まとめ
⑭	パルセイロとの交流 ※リバーフロントガーデン
⑮	" " 「試合をやろう」



3 Tさんの姿から

【醸成段階の姿】

教師とパスをすると大きく方向がずれる。教師が、シュウタくん（段ボール製のトンネル型ゴール）をTさんとの間に置き、シュウタくんの穴を通してTさんにパスをすると、手でシュウタくんの穴の前にボールを置いて蹴る。繰り返すうちにシュウタくんなしでも、以前より正確にパスができるようになった。

【単元前半の姿】

時間になると、スムーズに体育館に向かう。電子黒板のスケジュール表示や、時間を示すデジタルタイマーを見ながら、チームのメンバーと、ランニング→集合→チーム練習→作戦会議→試合→見学…などの活動に取り組む。チーム練習では教師や友だちの姿を見ながら同じようにボールタッチ練習やシュート練習をする。シュート練習を特に繰り返し行う。友達がボールタッチ練習をしているときに、教師と視線を合わせ、ボールを持ってゴール前に走っていく。教師が近づくとボールを置いてゴールに蹴り込む。繰り返しシュートをする中で、教師がゴール横からTさんに向かってボールを転がすと、走ってきてゴールに蹴り込んだ。ゲーム中、自分の近くにきたボールを手で拾い、床に置いて相手チームのゴールに向けてシュートする。

【単元中盤～後半の姿】

ゲーム中、ゴールに向かって蹴る姿が増えていく。教師がインサイドキックの演示をすると、徐々に蹴り方が、それまでのつま先蹴りからインサイドキックの形に変わりゴールに向かって以前より正確に蹴ることができるようになった。Tさんのシュートがゴールに入り、教師や友

だちが「ナイスシュート」と言って手を差し出すとハイタッチをしてにっこり笑う。Tさんから手を差し出してハイタッチをすることもあった。

【本単元で見られたTさんの育ちの姿】

- サッカーを題材にした学年集団の授業（移動時間を含めて 50 分程度）に、繰り返し落ち着いて参加することができた。予期せぬ展開が連続的に起きるゲーム活動に、自分の願いを持って積極的に参加することができた。
- チームの仲間とハイタッチをしてゴールの喜びを繰り返し体験することができた。
- 「ゴールしたい」という目標を持って活動し、その目標を実現するためにボールを追いかけたり、教師の姿を取り入れて蹴り方を変化させたりすることができた。

4 考察

（1）「情緒の安定」につながった支援

- ・やることを時系列に図と簡単な言葉で示した電子黒板
- ・カウントダウン式で終わりを音と数字で示したデジタイマー
- ・常に活動をともししてきた同学年の友だちとの活動
- ・チームのメンバーやチームのカラー、ゲームの順番などを固定する
- ・毎日同じ時間帯に同じ場所で授業を行う
- ・1時間のスケジュールを固定する

（2）達成感満足感を支える支援

- ・本人にとっての「楽しさ」（ゴールにボールを蹴り込むこと）をとらえそれを位置づけた。
 - ・自分にもできそうというイメージが持てること
- 最初は自分の意図した場所に蹴ることが難しかったが、「シュウタクくん」を使って行った教師とのパス練習を通して、どうやって蹴れば、どんな軌道を描くのかイメージを持てるようになっていったのではないかな。
- ・一緒に活動する教師や友達の称賛



教師や友達が笑顔でハイタッチを求めてくるのが、とても心地よい成功体験として蓄積され、「もっと入りたい」という気持ちにつながったのではないかな。

【実践事例5】高等部『器械運動』平成22年度

「わかる」「できる」「かかわる」状況づくりから主体的に跳び箱や平均台の種目に取り組んだSさん

『器械運動』の実践から以下のような支援が有効であることがわかった。

（1）「わかる・できる・かかわる・楽しい」授業づくり

○「わかる」活動の見通しがもてる

- ・視覚的な支援が有効←足形や手形 写真カード、絵
- ・やり方がわかる←1時間の授業の流れを同じにする

○「できる」

- ・活動が選択できる←単元の後半に個人で選択できる時間を設定
- ・単元の中で同じ活動を繰り返す←先生や友だちとペアになって体ほぐし
- ・教師や友だちの示範（活動の様子）を見る場の設定
- ・基礎的な動きを身に付けるための場の設定



○「かかわる」

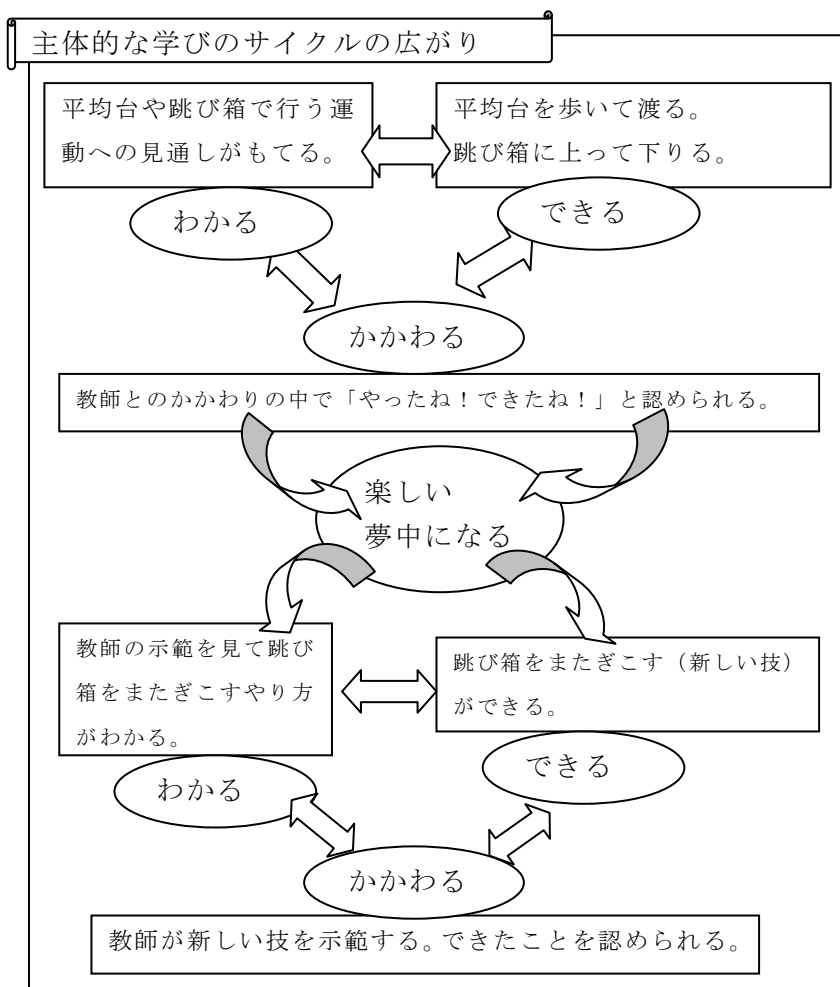
- ・ 友だちや先生とかかわる場の設定←体ほぐし／準備や片付け
- ・ 1時間の中に集団化と個別化の場の設定
←はじめ（集団）なか（個別）おわり（集団）



（２）教材の価値の見直し

- ・ 生徒の実態に合わせた種目（鉄棒・マット等）ごとの特性の見直し

（３）Ｓさんの学びのサイクルの広がり



単元の最初では時間いっぱい活動することが難しかったＳさん。本人の好きな種目を選べるようにしたり，教師も一緒にかかわりながらできた時には称賛したりするようにした。単の後半では，自分から教師の手を引いて，自分の好きな平均台や跳び箱に繰り返し取り組む姿が見られるようになった。また，跳び箱では，教師の示範を見て，今まで出来ていた技（上って下りる）だけでなく，新しい技（またいで越す）ことにも自分から挑戦し，できるようになる場面も見られた。単の後半では，時間いっぱい活動に取り組むことが多くなった。



6 研究の成果と課題

（１）成果

- ① 個別の指導計画をもとに，児童生徒の願いや課題を見返していくことが主体的にかかわる姿につながっていくことがわかってきた。
- ② 児童生徒の興味関心や実態に合わせて，単元を設定し，場の設定や教材教具を工夫していくことが主体的にかかわる姿につながることをわかってきた。

（２）課題

- ① 様々な実態をもつ児童生徒に合わせて，より個に応じた適切な支援を行うためにはどのようにしていけばよいか，明確にしていく必要がある。
- ② 児童生徒の個に応じた，より客観的で具体的な評価について，検討していく必要がある。

第 11 分 科 会

研究主題

自らが躍動し、運動する楽しさを味わう体育学習

～ 児童生徒の願いが実現するための場の設定や支援を工夫して ～

信州大学教育学部附属^{とくべつしえん}特別支援学校

日 程

9:00 9:30 9:35 10:15 10:40 11:30 12:40 12:55 14:15 14:45 15:00

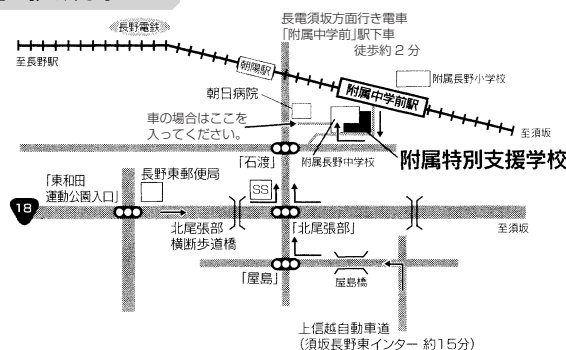
受 付	移 動	公開授業①(中学部)	休憩(小学部参観)	公開授業②(高等部)	昼食・休憩	開会行事	研究発表	研究協議	指導講評	閉会行事
--------	--------	------------	-----------	------------	-------	------	------	------	------	------

公開授業内容

中学部 陸上運動 体育館

高等部 体づくり運動 体育館

学校所在地



交通機関

- 最寄駅
長野電鉄「附属中学前駅」下車 徒歩 2 分
- 経 路
長野駅
↓ 所要時間 13 分
長野電鉄「附属中学前駅」下車
徒歩 2 分

学 校 概 要

学校名	信州大学教育学部附属特別支援学校		
校長名	小 島 哲 也		
学級数	9学級	児童・生徒数	53名
所在地	〒381-0016 長野市大字南堀 109		
連絡先	TEL 026-241-1177 FAX 026-241-1019		

【学校紹介】

○ 本校の目的と使命

本校は、学校教育法に基づき、知的障害のある児童生徒に対して、障害による学習上または生活上の困難を改善し、自立を図るために必要な教育を行うことを目的としています。また、国立大学法人信州大学教育学部の附属学校として、学生の教育実習を行うとともに、特別支援教育の理論と実践に関する研究やその実証を通して、特別支援教育の向上発展に寄与するという使命を担っています。



○ 教育方針

本校の目的を実現し、使命を果たすために、以下の教育方針に則り、学校・家庭・地域の支援者との協働により、子ども主体の生活づくりを進めます。

- 1 子どもの願いを大切にした教育を、学校・家庭・地域の三者で協力し合って進める。
- 2 子どもが毎日、目当てと期待をもって送れる生活づくりを目指す。
- 3 子ども一人一人のよさ（個性）を伸ばす教育を進める。
- 4 個別支援計画（個別の指導計画）を基にした授業改善を進める。
- 5 小学部・中学部・高等部および社会へのつながりを大切にした教育を行う。



○ 学校教育目標

自らの力をじゅうぶん発揮し、主体的に取り組む生活を今と将来にわたって実現する児童生徒の育成

1 研究主題

自らが躍動し、運動する楽しさを味わう体育学習
～児童生徒の願いが実現するための場の設定や支援を工夫して～

2 主題設定の理由

本校の学校教育目標は、「自らの力をじゅうぶん発揮し、主体的に取り組む生活を今と将来にわたって実現する児童生徒の育成」である。

学校教育目標を目指し、体育の授業においても一人一人が自らの力を発揮し、運動する楽しさを味わいながら主体的に活動してほしいと考えている。そのためには、「楽しく体を動かしたい」「この動きを楽しみたい」「上手になりたい」「友達と一緒に体を動かしたい」などの運動に対する児童生徒の願いを大切にしたい体育の授業展開が求められる。一人一人の児童生徒について運動に対する願いを推察し、それを基に、個に応じて運動の特性をとらえ直し^{*1}、その特性に触れるための場の設定や支援を工夫していくことにより、児童生徒は自らの力を発揮しながら、主体的に運動すると考えている。そして、願いにそって運動し、個に応じた運動の特性に触れることによって、児童生徒は体を動かす心地よさを味わう、新しい動きに挑戦したり技能の向上を感じたりする、教師や仲間とかかわるといった運動する楽しさを味わうと考えている。ひいては、そのことが今と将来にわたって健康で安全な豊かな生活につながると考えた。

そこで、研究主題を、「自らが躍動し、運動する楽しさを味わう体育学習」とし、体育の授業づくりを行うことにした。

3 研究の仮説

このような児童生徒に

- 毎朝、一日の始まりに行っている体操やマラソンに進んで取り組む児童生徒
- 好きな運動を繰り返し行う児童生徒
- 動きが上達してくると、意欲的に運動する児童生徒
- 活動に見通しがもてると、自分から運動しようとする児童生徒
- 教師の声掛けや称賛を受け、意欲的に運動する児童生徒



このような手だてをすれば

- 一人一人の児童生徒の運動に対する願いを推察する。
- 個に応じて運動の特性をとらえ直す。
- 個に応じた運動の特性に触れるための教材教具の準備、視覚的な支援、ルールの工夫、ゲーム的要素の導入などをする。

^{*1} 個に応じて運動の特性をとらえ直す：一人一人の児童生徒の体の動きの特徴を考慮しながら、その児童生徒にとっての運動の魅力（楽しさや達成感を得る動きやかかわり）を、運動に対する願いの推察を基にとらえること。本校では、この魅力のことを、「個に応じた運動の特性」と呼んでいる。

- 見通しをもちやすくするために、一時間の活動の流れ、単元の展開を工夫する。
- 体の動かし方を演示したり、できるようになった動きについて称賛したりする。
- これまでに経験してきた運動を基にして、新しい動きやルールを取り入れる。
- 教師や仲間とかかわりたいと思ったり、かかわる必要性が生まれたりする授業を構想する。
- 自己評価がしやすく、他者からの評価も得やすい場の設定をする。



こうなるだろう

- ① 自ら運動する場の準備をする、教材教具を使って運動するなど、運動のやり方が分かり見通しをもって取り組む。
- ② 体を動かす心地よさを感じて、繰り返し取り組む、最後まで取り組む、時間いっぱい取り組むなどする。
- ③ 新しい場や動き、ルールが加わったときに、それを取り入れて、さらに楽しんで運動する。
- ④ より複雑な動きに挑戦しようとする。
- ⑤ 上手になったこと、できるようになったことを仲間や教師に伝え、見てもらおうとする。
- ⑥ 教師や仲間を誘って運動する、教師や仲間の動きを見る、まねる、取り入れるなどする。

4 研究の重点

- (1) 運動する児童生徒の姿から、運動への興味・関心（好きな動き、繰り返し行っている動き、得意な動きなど）や、だれと一緒に活動したいのか、運動のどの部分が好きなのか、どんな動きができるようになりたいのかなど、児童生徒の運動に対する願いの推察
- (2) 児童生徒の運動に対する願いの推察を基にした、一人一人の児童生徒に応じた運動の特性のとらえ直し
- (3) 個別支援計画（一般的には、個別の指導計画）を基にした、児童生徒の伸びている力を踏まえた場の設定や支援の工夫
- (4) 体を動かす心地よさを味わうことや、新しい動きを習得したり技能が向上したりすることを視点とした、個に応じた運動の特性に触れるための場の設定や個に応じた支援
- (5) 教師や仲間とともに運動したり、かかわって活動したりする場の位置付け
- (6) 個に応じた運動の特性に対する児童生徒の運動の姿の評価と、その評価の活用

5 研究の内容と実践事例

実践事例Ⅰ

児童生徒が主体的に運動するために、運動に対する願いを基に個に応じた運動の特性をとらえ直し、その特性に触れるための場の設定や支援の工夫

－安心して運動に取り組み、繰り返し挑戦できるようになったＴさん（高等部１年・男子）－

運動する楽しさを味わうための場の設定の工夫

－教師や仲間とかかわる楽しさを味わいながら運動したＩさん（高等部３年・男子）－

「附特体育館でパワーアップ ～サーキット運動を楽しもう～」(平成２２年１０月 高等部) より

(1) 単元のねらい

- ① 仲間と協力して準備・片付けをする，順番・ルールを守って安全に運動をする，教師や仲間とかわりながら運動する。
- ② 自分の願い，目当てに向けてどのように運動したらよいか見通しをもったり，繰り返し取り組んだりする。
- ③ 跳ねる，支える，バランスを取る，転がるなどの運動に合わせた体の使い方をする。

(2) 単元展開の概要

時 数	学 習 活 動
第1時 9月 7日	・転がる運動，ジャンプする運動，バランスを保つ運動を楽しむ。
第2時 9月24日 第3時 9月29日	・自分が選んだ幾つかのパワーアップコーナーで運動を楽しむ。
第4時 10月 6日 第5時 10月15日 第6時 10月20日	・一連の運動を組み合わせるサーキット運動をする。

(3) 本時の学習 平成22年10月15日（金） 13：40～14：30

① ねらい

前時撮影したビデオ映像を見て，楽しかった，頑張った運動を思い出し，自分が選択したコーナーで思い思いの方法で運動することにより，自分が楽しみたい，頑張りたいパワーアップコーナーでする運動に願いをもち，自分の選んだ方法で運動をする，教師が演示した動きを取り入れて運動する，仲間の動きをまねて運動するなどして，サーキット運動を楽しむ。

② 学習を進める上での留意点

- ・コーナー担当の教師が，用具の位置や固定具合を確認し，常に安全面に配慮する。

③ 展 開

段階	学習活動	予想される生徒の姿（○）と支援（▲）	時間	備 考
導 入	1 用具を全員で準備する。	○みんなで協力して準備を進める。	5分	ネット、一本橋、マット、跳び箱、セーフティマット、エアーマット、麻袋、キャタピラ CDデッキ、「ダンスラジオ体操」のCD VTR、ディスプレイ
	2 整列・あいさつをする。	○クラスごとに整列して元気よくあいさつをする。	4分	
	3 「ダンスラジオ体操」に合わせて準備体操をする。	○リズムに合わせて体を動かし、楽しみながら準備体操を行う。 ▲C T*2が前に、S T*3が列の間に立ち、一緒に準備体操をする。		
	4 本時の願いを確かめる。	○前時の活動で楽しかった運動、頑張った運動を思い出す。 ▲運動を楽しんでいる、頑張っている様子を撮影したビデオを映し、「色々な転がり方して楽しんでもいましたね」などと声を掛け、楽しんだり頑張ったりしている姿を確認する。	4分	
展 開	5 自分が楽しみたい、頑張りたいパワーアップコーナーで運動する。	○楽しみたい、頑張りたいパワーアップコーナーに移動し、思い思いの方法で運動を楽しむ。 ▲教師が運動を演示したり、運動する生徒同士のかかわりを仲介したりして、安全面に配慮しながら生徒と一緒に活動する。	12分	

*2 CT：チーフティーチャー。全体を掌握し、授業を統括するとともに、担当する児童生徒の支援をする教員。

*3 ST：サブティーチャー。CTの意を受けて授業を進めるとともに、担当する児童生徒の支援をする教員。

	6 サーキット運動をする。	○コースを通してサーキット運動をする。 ・スタート地点に移動し、A組からスタートする。 ▲各コーナーを担当するS Tが、安全面に配慮しながら個の願いに合わせて生徒の活動を支援する。	20分	CDデッキ,「ハピネス」のCD
まとめ	7 全体で本時の学習のまとめを行い、次時への見通しをもつ。	○今日の活動の感想を発表する。 ○次の時間に頑張りたいことを発表する。 ▲C Tが、発表しようとする生徒の意をくみ、全体に広める。	5分	

個に応じた運動の特性(◎)とそれに触れるための場の設定や支援(△)

【Tさん】

◎ロープにつかまり、宙に浮く感覚が楽しい運動。

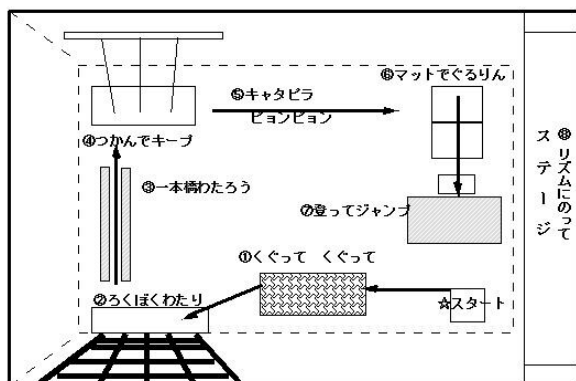
△Tさんの要求にこたえて、体を支えたり体勢を立て直したりする。

【Iさん】

◎一本橋の向こう側から渡ってくる仲間とじゃんけんをして、勝ったら前に進めるといったルールで一本橋を渡るのが楽しい運動。

△向かい合った人にじゃんけんして勝つと前に進めると、負けると橋から降りて端からやり直しといったルールを取り入れ、Iさんと一緒にやりながらルールの確認をする場を設ける。

(4) 会場図



キャタピラ

マットでぐるりん



(5) Tさんの姿より

Tさんは、「つかんでキープ」(ターザンロープをつかんでぶら下がるコーナー)では、怖そうな表情をし、ぶら下がることをためらっていた。ぶら下がってすぐにマットに足がつくと残念そうにうつむいた。そこで、教師が踏み台を用意し、踏み台に乗り、ジャンプしなくても手足でロープをつかめるようにしたところ、短時間、体が浮くようになった。さらに手足でロープをつかんだ後に教師が体を支え、体勢を立て直すことにより、ぶら下がる時間が増え、うれしそうな表情を見せるようになった。このコーナーに安心して取り組むようになったTさんは、ターザンロープを使っの運動に繰り返し挑戦するようになった。さらに体が下がってきたときには、ぶら下がる感覚を楽しむかのように足をばたつかせながら近くの教師の顔を見て、体を持ち上げてほしいことを伝えるようになった。



<考 察>

Tさんの姿から、教師は、「自分の体を浮かせてしがみつきたい」という願いを推察した。そして、Tさんの願いを基に、個に応じた運動の特性をとらえ、Tさんにとっての「つかんでキープ」

「プ」での運動の特性を、「ロープにつかまって体が宙に浮く感覚が楽しい運動」であるととらえた。この運動の特性に触れるために、踏み台を用意し、Tさんの体を支えたり体勢を立て直したりしたことによって、安心して運動に取り組み、繰り返し挑戦するTさんの姿につながったと考える。さらにTさんが、教師に体を支えてほしいと伝えてきたときには、すぐにこたえられるように近くで見守っていたことも安心して運動したり、繰り返し挑戦したりする姿につながったと考える。

(6) Iさんの姿より

Iさんは、単元初期から、各コーナーの運動に合わせて、跳ねる、体を支える、バランスを取る、転がるなどの動きを自分なりに工夫し、黙々と取り組んでいた。そこで教師がIさんに、「楽しみたいコーナーはどこですか」と尋ねると、ゲーム的要素のある、「一本橋」と答えた。「一本橋わたろう」では、橋の上で出会った教師や仲間とじゃんけんをしながら、笑顔で楽しむ姿が見られた。じゃんけんで勝つと軽くくぶしを突き上げて喜んだり、負けると急いで一本橋の端に戻って渡り始めたりするなど、教師や仲間と一緒に楽しんでいた。自分の好きなコーナーで運動する時間が終了すると、また自分のペースでサーキット運動に取り組み始めた。



<考 察>

Iさんは、それぞれのコーナーでいろいろな動きを楽しんでいた。サーキット運動に取り組む時間とは別に、自分が楽しみたいコーナーで運動する時間をとったり、ゲーム的要素のあるコーナーを取り入れたりしたことは、教師や仲間とかかわりながら運動することの楽しさも味わうことにつながると考える。また、教師や仲間とかかわりながら運動を楽しむ場を設けたことは、Iさん自身が、サーキットのそれぞれのコーナーで運動する時間、教師や仲間とのかかわりを楽しむ時間とめりはりをつけながら運動することにつながった。教師や仲間と直接かかわって運動することも、運動を楽しむ一つの要素として大事にしていきたいと考える。

実践事例Ⅱ

生徒の運動に対する願いの推察を基にした、個に応じた場の設定や支援の工夫
—自分から繰り返し運動に取り組むようになったHさん（中学部1年・女子）—

「とんで のぼって くぐって ゴー！」（平成23年6月 中学部）より

(1) 単元のねらい

- ① 自分のやりたい障害物に向かう、仲間や教師とかかわる、繰り返し取り組むなどして、楽しく運動する。
- ② 障害物を越える順番や越え方についての演示を見て、運動に見通しをもち、教師や仲間の運動の仕方をまねたり、障害物の越え方について工夫したりする。
- ③ 跳び越える、登る、くぐる運動に合わせた体の使い方をする。

(2) 単元展開の概要

時 数	学 習 活 動

第1時	5月31日	・「うんどうかい」で取り組んだリレーと、障害物をサーキット状に並べた障害物リレーに取り組む。
第2時 第3時 第4時 第5時	6月7日 6月14日 6月21日 6月24日	・複数の障害物が置かれたコースを、三つのチームに分かれ、リレーに取り組む。 ・自分のやりたい障害物を選び、運動する。 ・高くなったり、幅が広がったりした障害物に繰り返し取り組む。
第6時	6月28日	・これまで楽しく取り組んできた運動を発表する。

(3) 本時の学習 平成23年6月24日(金) 11:40～12:20

① ねらい

リレーをしたり、場を選んだりしてやりたい運動に取り組んできた生徒たちが、さらに高くなったり幅が広がったりした障害物で、運動に楽しく取り組む。

② 学習を進める上での留意点

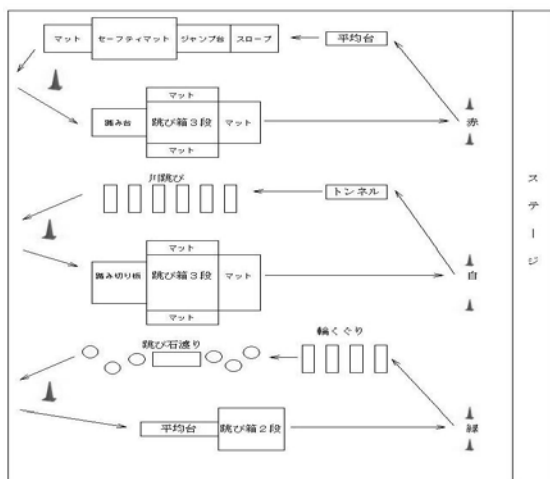
- ・安全に運動できるように、運動用具の下にマットを敷いたり、使い方を演示したりする。
- ・リレーのチームや順番が分かるように、帽子やゼッケンを着用する。

③ 展 開

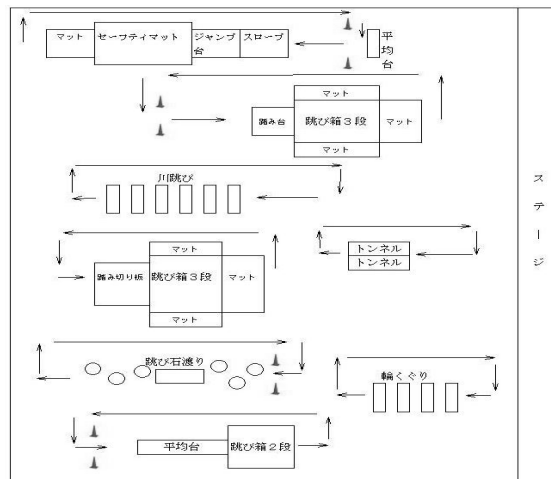
段階	学習活動	予想される生徒の姿(○)と場の設定、支援(▲)	時間	備 考
導 入	1 「準備体操」をして、体をほぐす。	○先生や友達と一緒に楽しく体操をしたいな。 ○音楽に合わせて、体を大きく動かしたいな。 ▲教師や仲間と楽しく体を動かせるように、なかよし体操やストレッチを行う。 ▲体をほぐすポイントが分かるように声を掛ける。	7分	・ラジカセ ・CD
展 開	2 三つのチームに分かれてリレーをする。 3 それぞれの器具の場所に分かれて運動する。	▲複数の障害物で三つのコースを作る。 ▲器具の変化に気づいたり、運動の仕方が分かるといえるように、コースを走って演示する。 ▲運動の仕方や器具の使い方、順番を確認する。 ○3段の跳び箱の上に登りたいな。 ○ジャンプ台に勢いよく走って、遠くに跳びたいな。 ○フラフープにぶつからないように通り抜けたいな。 ▲生徒がやりたい運動に繰り返し取り組めるように、器具を分けて配置する。 ○ジャンプ台に挑戦したいな。 ○輪くぐりをもう一回やりたいな。 ▲運動に取り組む姿を称賛したり、運動の仕方を演示したりする。	12分 15分	・帽子 ・ゼッケン ・跳び箱 ・踏み台 ・踏み切り板 ・平均台 ・セーフティマット ・マット ・フラフープ ・トンネル ・ゴムひも ・ペットボトル ・ラジカセ ・CD
Hさんに応じた運動の特性(◎)とそれに触れるための場の設定や支援(△) ◎高いところに登って、そこから跳び下ることが楽しい運動。 △台上に立ち上がるときに体が安定するように支える。				
ま と め	4 まとめをする。	▲今日楽しんだり頑張ったりした運動を発表する場面を設定する。 ○平均台を落ちないように渡れたよ。 ○ジャンプ台に走って行って跳べたよ。 ▲楽しく運動していた姿や頑張っていた姿を称賛する。	6分	

(4) 会場図

① リレー運動



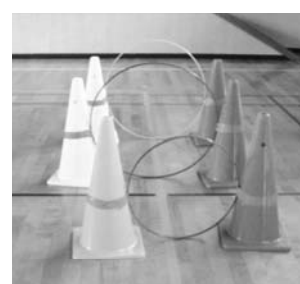
② 自由運動



跳び石渡り



輪くぐり



(5) Hさんの姿より

単元初期のHさんは、自由運動の時間になると教師を誘って跳び箱の近くに移動し、跳び箱をじっと見詰めていた。教師が、「やってみようか」と声を掛けると、跳び箱に手をつき体を持ち上げようと何度も挑戦した。教師が踏み台を用意して台上に登りやすくすると、すぐにそれを使って台に登り、立ち上がって教師の手を取るとにっこりしながら台の横へ跳び下り、同じ運動を自分から繰り返し行った。教師が台上に立ち、台の端まで歩いて、「ここからジャンプしてみよう」と声を掛け、跳び下りる演示をすると、同じように台の端まで歩いた。そして、「ジャンプしてみよう」という教師の声掛けをきっかけに、自分で台上からマットの上に跳び下り、さらに何回も繰り返しこの運動を行った。単元終盤の自由運動の時間では、教師が、「行こう」と声を掛けると、跳び箱の近くに自分から行き、跳び箱の上に登って跳び下りるという運動をするようになった。



< 考 察 >

Hさんの姿から、教師は、「台上に登って跳び下りたい」という願いを推察した。そこで、個に応じた運動の特性を、「高いところに登ってそこから跳び下ることが楽しい運動」ととらえた。そしてHさんの願いが達成できるように場の設定を工夫したり教師が演示を行ったりしたことが、自分から繰り返し取り組む姿につながったと考える。また、Hさんの近くで教師が見守りながら声を掛けたことにより、安心して運動に取り組めたと考える。また、この運動経験を積んだことにより、単元終盤においても、自分から跳び箱に登って跳び下りるという運動につながったと考える。

実践事例Ⅲ

これまで経験のある運動に新たな器械を加えた場の設定や、教師や仲間のかかわり方の工夫
 一体の使い方に少しずつ変化が見られたKさん（高等部3年・女子）－

「チャレンジしよう 楽しもう ジャンプ・転がる・バランス運動」（平成23年6月 高等部）より

(1) 単元のねらい

- ① 仲間と協力して器具などの準備をする，順番・ルールを守って安全に運動をする，教師や仲間とかかわりながら運動をする。
- ② 自分がしたい運動や目当てに向けてどのように運動したらよいか見通しをもったり，教師や仲間のする運動を取り入れたりする。
- ③ 転がる運動，ジャンプする運動，バランスをとる運動に合わせた体の使い方をする。

(2) 単元展開の概要

時 数	学 習 活 動
第1時 5月20日 第2時 5月23日	・転がる運動，ジャンプする運動，バランスをとる運動について教師の演示を見る。 ・転がる運動，ジャンプする運動，バランスをとる運動をする。
第3時 6月 1日 第4時 6月17日	・やってみたい，チャレンジしたい，頑張りたい，楽しみたいなどの思いから「運動カード」を選ぶ。
第5時 6月24日	・自分がしたい運動にチャレンジしたり，運動を楽しんだりしながら，ジャンプする・転がる・バランスをとる運動に取り組む。
第6時 7月13日	・自分がチャレンジしたり楽しんだりした運動を発表する。

(3) 本時の学習 平成23年6月24日（金） 13：40～14：30

① ねらい

三つの運動のコーナーで思い思いの運動をする生徒たちが，「運動カード」から自分のチャレンジしたい運動を選び，一緒に活動する教師や仲間のする運動をまねる，自分の考えた方法で運動をする，教師が演示した動きを取り入れて運動をするなどして，自分がしたい運動に取り組む。

② 学習を進める上での留意点

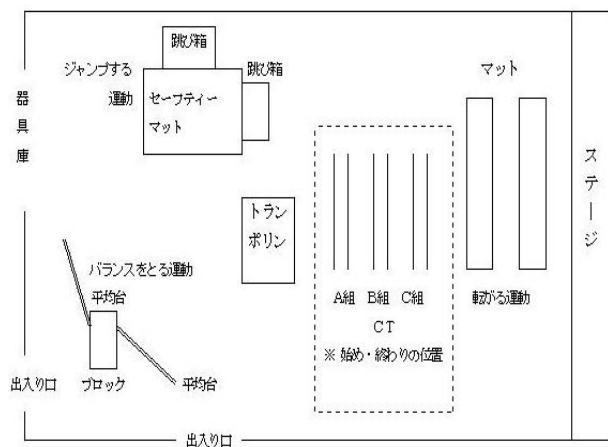
- ・一緒に活動する教師が，運動に使用する器械・器具の位置や固定具合を確認し，常に安全面に配慮する。

③ 展 開

段階	学習活動	予想される生徒の姿（○）と場の設定，支援（▲）	時間	備 考
導入	1 用具を全員で準備する。	○クラスごとの分担により，協力して準備を進める。	5分	平均台，セーフティーマット，跳び箱，トランポリン，ソフトブロックはあらかじめ設置しておく。
	2 整列・あいさつをする。	○クラスごとに整列して，当番が号令を掛け，全員で元気よくあいさつをする。	4分	CDデッキ，「ダンスラジオ体操」のCD
	3 「ダンスラジオ体操」に合わせて準備体操をする。	○リズムに合わせて体を動かし，楽しみながら準備体操を行う。 ▲CTが前に，STが列の間に立ち，一緒に準備体操をする。		
	4 本時の活動を確認する。	○前時の活動で選んだ「運動カード」を見返し，今日チャレンジしたい，楽しみたい運動を確認する。 ▲STが「運動カード」を示しながら，「今日の体育でチャレンジしたい，楽しみたい運動は何で	6分	

		すか」と聞く。 ▲C Tが、「紹介してくれる人はいますか」と声を掛け、数名の生徒に紹介してもらう。 ▲C Tは安全に運動できるように近くで見守り、必要に応じて補助する。		
展 開	5 7分間でローテーションしながらジャンプする・転がる・バランスをとる運動をする。	○クラスごとにジャンプする・転がる・バランスをとる運動のコーナーで自分のしたい運動にチャレンジしたり、運動を楽しんだりする。 ① ジャンプする A組→C組→B組→希望 ② 転がる B組→A組→C組→希望 ③ バランスをとる C組→B組→A組→希望 ▲教師は、安全面に配慮しながら生徒の様子を見守り、それぞれのコーナーで一緒に運動したり、演示や称賛の声を掛けたりする。 ▲デジタイマーで時間を示し、ブザーで終わりを知らせる。 ▲3回目が終了したらC Tが、「最後です。もう一度やりたいコーナーで運動してみましょう」と声を掛ける。	30分	7分間で運動のコーナーをローテーションする。
Kさんに応じた運動の特性(◎)とそれに触れるための場の設定や支援(△) ◎自分一人で、または教師や仲間に押してもらって、転がるのが楽しい運動。 △Kさんが一人で転がっている姿をとらえ、「上手ですよ。その調子で」と声を掛ける。 △マットの上でたわらこころの姿勢をしてじっと待っているときには、教師や仲間が押すようにする。				
ま と め	6 本時の活動を振り返りながら柔軟体操をする。 7 整列・あいさつをする。	○本時の活動について、近くにいる教師や仲間とやり取りして振り返りながら柔軟体操をする。 ▲S Tは、生徒の近くに位置し、声を掛けながら生徒と一緒に柔軟体操をする。 ○クラスごとに整列して、当番が号令を掛け、全員で元気よくあいさつをする。	5分	

(4) 会場図



ジャンプする運動



バランスをとる運動



(5) Kさんの姿より

Kさんは、転がる運動のコーナーで、体を横にして寝転がり、「運動カード」の「横転がり」を繰り返した。自分のペースでゆっくり転がるKさんの姿をとらえた教師が、「Kさん、上手ですね。その調子で頑張って」と声を掛けると、「うん」と返事をしながら転がり続けた。ゆっくり転がっているときには上半身を使って体をひねり、一回転するごとに肘を立てて上半身を起こし、また反動を付けて転がるような体の使い方をしていた。一方で、傾斜マットの部分で転がる時には、少しスピードが上がり、体の使い方もしずみになった。そこで、「運動カード」の中から「たわらころころ」のカードを提示し、教師がKさんの体を押して勢いをつけて転がした。するとKさんは教師の押す力を受け、体を大きくひねる間もなく転がり続けた。その後、Kさんは、「たわらころころ」の姿勢でじっと待っていたり、教師の手を引いたりする姿が見られ、教師や仲間が転がすとうれしそうな表情を見せた。また、回数を重ねると、転がす相手から逃げるように全身を使ってスピードを上げて転がる姿も見られるようになった。



<考 察>

Kさんの姿から、転がる運動コーナーにおけるKさんの運動の特性を、「自分一人で、または教師や仲間を押してもらって、転がるのが楽しい運動」ととらえた。Kさんは、これまでの経験から「横転がり」のやり方の見通しをもち、単元の初期から繰り返し一人で取り組む姿が見られた。また、今回初めて傾斜マットを使用したことにより転がるスピードが少し上がり、これまでとは違う「横転がり」の転がり方も体感できたと考える。さらに、「たわらころころ」では、教師や仲間が勢いよく体を押すことにより、自然と転がりやすい姿勢をとるようになった。「たわらころころ」の運動を通して教師や仲間とかかわりながら運動することの楽しさを感じ、転がす相手から逃げるように全身を使って転がろうとする体の動きにもつながっていったと考える。

6 研究の成果と課題

(1) 成 果

- ① 生徒の運動に取り組む姿や表情などから、運動に対する一人一人の願いを推察し、生徒の願いを基に個に応じて運動の特性をとらえ直し、その特性に触れるための場の設定や支援を工夫してくことが、主体的に運動する姿につながるようになってきた。
- ② 教師や仲間とかかわって運動する場を設定することが、生徒が主体的に運動する姿の一つの要因になることが分かってきた。
- ③ これまで経験のある運動を基にして、新たな器械や器具を取り入れ運動の場を設定することが、今までとは違った形で体を動かし、新たな動きをする姿の表れに有効であることが分かってきた。

(2) 課 題

- ① 体を動かす心地よさを味わうことに重点を置くのか、新しい動きを身につけたり動きが改善したりするといった技能面の向上に重点を置くのかを個に応じて明確にし、場の設定や支援の工夫をする必要がある。
- ② 新しい動きに挑戦したり技能を身につけたりすることの楽しさに願いをもった生徒に対して、どのような体の動きの上達を目指していくのかをより明確にし、支援していく必要がある。